

前を向いて

小六

私は、小さいころから、耳が片方、聞こえません。あれ、なんでだろう、右耳が聞こえないと、びっくりし、母に話しました。

試しに母に何か言ってもらい、左耳をふさいで聞いてみました。それでもなぜか聞こえません。私は心配になったので、病院に行つて検査をしてもらいました。それでも、その病院では何も分からなかったの、紹介状を書いてもらい、総合病院に行つてきました。お医者さんは何か言っています。でも、私はまだ小さ

く、何を説明されているのかよく分からなかったの、母にたずねました。

「ねえ、お母さん、さつき何て言われたの。」

少し、自分でも心配していました。母に言われたことは、

「あのねえ、あなたは片方の耳が聞こえないのよ。」

母も、とまどいながら言っていました。でも、もつとおどろき、悲しくなったのは私でした。あまりにも突然な事に言葉が出ませんでした。その日は、あまりにもびっくりして、悲しくて、大泣きしてしまいました。でも何日か経つてやつと、自分でその事実を受け止める事ができまし

た。

母は、

「お母さんも、全力で応えんするからね。だから、いろいろ大変かもしれないけれど、がんばってね。」
と言ってくれました。私はもう事實は事実なんだから、自分の体とうまくつき合って生きていこう、と決心しました。

そして、保育園を卒業し、一年生、二年生、三年生と月日が経っていきましました。私はだんだんと高学年になつていくにつれ、片方の耳が聞こえない事に、不便を感じてきました。先生の話は普通に聞き取れるのですが、学校生活での休み時間、帰りの道の友達との会話など、友達の声を

聞き取れません。特に、ざわついている中や、右耳の方で話される時は、もう何を言われてるのかさっぱり分かりません。自分の耳の片方が聞こえないという事は、少し悲しかったけれど、一年生、二年生、三年生のころまでは今ほど不便に感じた事はありませんでした。

今、私が一番不便に感じている事は、音がどこから聞こえてくるのかが分からない事です。時には、となりの班の子が、給食の時、私の名前を呼び、私が、きよろきよろしていると、その子たちが、
「あいつっていつも、名前を呼ぶときよろきよろするんだぜ。」
とからかって笑っていました。私は

自分に何か用があつて名前を呼ばれたんじやない、試されたんだと分かるといかりと悲しみでいっぱいになりました。

どうせ、人に私の気持ちは分かるはずないと泣きそうになつたけれど、泣くといつそうばかにされると思い、ぐつとがまんしました。そして、私は母にその出来事を話しました。

母は、
「そんな事言われたんだ・・・いやだったよね。お母さんもそんな事を言われたらあなたと同じ気持ちになるよ。でもね、そんな事に負けないくらい自分に実力をつけて、自分がこれだけは、だれにも負けないっていうものを作りなさい

い。それが自分の自信につながるから。がんばれ。」

と、言ってくれました。その時、私は、そんな事でなやむのだったら、自分に出来る事を増やそうと決心しました。それから、私はいつもいっしょにいる姉の字を見て、私もあんなにきれいな字を書きたい、そして妹のようなあんな上手な絵をかきたいと思ひ、二人を目標として出来る事をたくさん増やそうと、精いっぱいがんばってきました。今、思い返すとあんなにいやだった事があつて、それに対する母の一言が自分をここまで成長させてくれたのだと思ひました。

そう思うと、私は自分の周りには

こんなに支えてくれ、応えんしてく
れる家族がいるのだから自分もがん
ばらないと、という気持ちが生まれ
ました。そして私はその時、将来は
自分のような子を支えられる医者に
なりたいたいと思いました。

これからも、いやな事があったと
してもそんな事に動じないで新たな
目標に向かって、前を向いてがんば
ろうと思います。

